



ARI1505AV



ARI12AV

#### ARI500

ビームメイブレットップがオーバードライブサウンドで本領発揮。マホガニー、メイプル、マホガニーで構成されるスリプライネックがウォームに鳴く。コントロールは2ボリューム、2トーン。プレーンな外観からは想像もつかない振動が息づく。スペシャルメイブレットップと、マホガニーバック、芯の太いサウンドが特長。

#### ARI505

ジャズ・フュージョンタイプソリッドギターがキャラクター。スプルーストップが穏やかなレスポンスと明瞭なアタックレベルをゲインし、新しいソリッドアコースティックの世界を拓いた。ネックは、マホガニー。そして、フィンガーボードにはブラジリアンローズウッドを用い、ボディ材とのコンビネーションがウォームで無理のないサウンドパフォーマンスをもたらす。新開発、スーパー58ジャズビックアップがマウントされ、あらゆる表現が可能になった。



ARI500CS



ARI200AV

#### ARI200

アッシュ材の採用でウエイトバランスとサウンドバランスをクリアー。プレイヤビリティを追求したネック角度は、無理のないダブルネック奏法を実現。ステレオアウトでネック別の音づくりも可能にした。

#### ARI12

ARの基本ポリシーをそのまま生かした12弦。バランスの良いナチュラルフランジングを体験出来る。単なるバックギンにお使いになるかは、あなたにおまかせします。

# AR

イバニーズギター、ロングスト・スタンディング、モデル。最初の一本から、リファインにリファインを重ね、現在に至っている。トップアーティストのアクチュアルなアドヴァイスの数々と、レーザーホログラムなど最先端科学による数値的分析。さらに、スキルフルなクラフトマンのクリエイティブ・アイが息事にバランスした逸品ぞろい。

ARは60年代後半にデビューした。現在のロックシーンやフュージョン、ジャズの流れは、ちょうどこの頃形をとり始めたといいたいだろうから、ARの歴史は、モダンミュージックのキャリアとダブルイメージになるはずだ。フラワームーブメント華やかなり頃のウエストコースト。ARは活動していた。グレイトフル・デッドのリードシンガー、ボブ・ウエイアーのギターがARだった。彼らはまだまだ健在。当時ウエストコーストは世界中のヤングジェネレーションにしゅん然なメッセージを発する震源地だった。ジェリー・ガルシア率いるこのバンドのディスクには、今なお衰えないフレッシュな説得力がある。ボブの絶妙のリズムカッチングが我々のスタッフを大いに力づけたものだ。シスコのベイエリアの自宅を訪れ、長い時間話し込んだ思い出がある。庭に立派なスタジオがあった。スティーブ・ミラー・バンドもシスコのグループである。シカゴからシスコへやってきた。当時は思ひにくみにサンタラスのこの男もARを愛用している。ボズ・スキヤクスがメンバーだったこともある。イバニーズの旧モデル、アイスマンを購入したのがつき合いの始まり、好漢である。一見カウボーイ、いや実際に郊外にランチを持ち、牧童もしているという話だ。楽器ショウが聞かれているときなど、身銭をきって我々をサポートしてくれる。イバニーズはパブリシティのフィールドで、たびたび我々のグッドフェローズとよく記すが、広告の

人間工学とオプト・エレクトロニクスが、メイクス・アップしたギター。ボディの振動特性に加え、シララルタルIIブリッジの装着が弦の振動をロスすることなく、ビックアップへ伝え、イバニーズ特有のサウンドが鳴り延びます。実際に手にとってみて、多くのトッププロフェッショナル愛用の理由を探ってください。

ためにこんな軽率なことは言えない。文字通りのフレンドシップがプロたちとの間に横たわっている。最近シロアルバムをリリースした、マイケル・ラザフォード(ジェネシス)、ロッド・スチュアートのバンドのジム・クラーク、L.A.の順役、ジョン・チヴィット・サウザーなども同様にARユーザーたち。バット・メセニーは、12弦のお客さん。エア・サプライのレックスやデヴィッドの今年の調子はどうだろう。すっかりスーパースターになってしまった。リンダ・ロンシュタットの仲間たち、ワディ・ワタケル、スライドギターの名手ダン・ダグモアも紹介しておこう。リンダのニューアルバムでもごきげんそのもののプレーを聴かせてくれる。それからレディングのフェスティヴァルでARを聴かせてくれたミッキー・ムーティも忘れられない。先日のジャパンツアーで、ハッピーな顔を見せてくれたホワイテ、スネイク健在なりである。それからシーウィンドのバッド・ニューネス、そしてボビー・コクラン、80年代に入ってからはおなじみスティーブ・ブルカサー、風雲児ゲイリー・ムーア、ARにはまだまだ紹介しきれないグッドフェローズがいる。彼らのアルバムからARの絶妙のサウンド・パフォーマンスをあげていただくのも一興ではないだろうか。



バット・メセニー。1954年8月12日、ミズリー州リーズサミット生まれ。ギタープレイヤー・バット・メセニー出現のきっかけは、歯列矯正器だったという。代々優秀なトランペッターを輩出してきたメセニー一家にあって、バットも例外なくトランペッターへの道歩んでいた。だから、歯並びにさえ問題なかったら、この神童ギタリストは生まれなかったはずだ。バットについて有名なエピソードがある。パークリーへ生徒として入学したバットのあまりの上手さに驚いた学院側が、講師に抜擢したという。アル・ディ・メオラやハイラム・ブロックは、そのときの教え子だった。とくに普通の人間のカテゴリーから逸脱した男だ。聞いていて、まさかノという過去を連続して通過してきた。しかし、そういう天才肌の男にありがちな高慢さは微塵もない。見ての通りである。彼のAR112は、ギターショップのウィンドにあるものを衝撃的にいいと思い購入したそう。メインギターES175にはストラップのエンドピンのところに必ず歯ブラシを差し込む。暑い季節には、リーバイスを膝のところで不揃いにカットオフしたパンツ。そしてズタズタをひっかけると。これがバット・メセニー・サマーシーズン・スタイルである。胸のすくファッションではないか。

